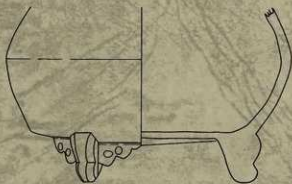


特別史跡

一乘谷朝倉氏遺跡37

平成18年度発掘調査・環境整備事業概報



福井県立一乘谷朝倉氏遺跡資料館



第120次調査(1区) SB6052 近景(南から)



第120次調査(2区) SD6062, SX6063 近景(北から)

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡37

平成18年度発掘調査・環境整備事業概報

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

序 文

本年度の発掘調査は計画調査と砂防激甚災害対策特別緊急事業に伴う緊急調査とを実施しました。

前者の上殿・馬出の両地区(第120次調査)では遺構・遺物が良好に遺存していることが確認できました。今後の調査に期待がもてます。また、後者では大岩谷川・城戸内川の両地区(第121・122次調査)では遺構・遺物の確認ができず、西新川地区(第123次調査)では明確な遺構を確認しました。それは立派な石垣や溝、建物の基壇状遺構でした。ここは西新町の字大門に位置し、曹洞宗大円山心月寺跡と推定されていたところで、その一角が顔を出したようです。心月寺は初代孝景が祖父教景の菩提を弔うために建立した寺院で、その寺名は祖父の道号心月をとっています。寺には雲水僧200～300名がいたと伝える大寺です。史跡指定地外だけに今後の動向に注意しなければいけない箇所です。

一方、環境整備事業の一般は第112次、第113次雲正寺整備工事を実施しました。遊歩道沿いで今後の活用が大いに期待できます。また、災害復旧は権殿、御所安養寺、下城戸塚の3箇所を実施しました。これで遺跡整備地の災害復旧は完了しました。

ところで、昭和42年から始まった遺跡の環境整備事業は今年で40年が経過し、古い整備地では修復を必要とする箇所がかなり散見されるにいたりました。今後、朝倉氏遺跡研究協議会や国・県のご指導をいただきながら対処していきたいと考えています。

ここに、本年度の発掘調査・整備事業の概要がまとまりましたので報告する次第です。両事業にご指導・ご協力いただきました関係者各位に厚くお礼を申し上げます。

平成19年3月

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
館長 青木 豊 昭

例言

1. 本書は、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館が平成18年度に実施した国庫補助事業による発掘調査、及び環境整備事業の概要報告書である。
2. 本年度は、「発掘調査・環境整備事業第3次中期10ヵ年計画」の2年次にあたる。本書は、第120次発掘調査の成果、第112・113次調査区の環境整備、および権殿地区他災害復旧整備工事の概要について収録した。
3. 本書の作成にあたっては、調査担当者が各項目を執筆し、項目末に文責を記した。なお、全体の編集は千木良礼子が担当した。
4. 遺構番号の頭に付した略記号は以下のとおりである。
SA：土塁（土塀・柵）、SB：建物（礎石・掘立柱等）、SD：溝・濠、SE：井戸、
SF：石積施設、SG：池・庭、SI：門、SK：土壕（柱穴、埋塞遺構等）、SS：道路（通路）、
SV：石垣、SZ：暗渠、SX：その他の遺構

目次

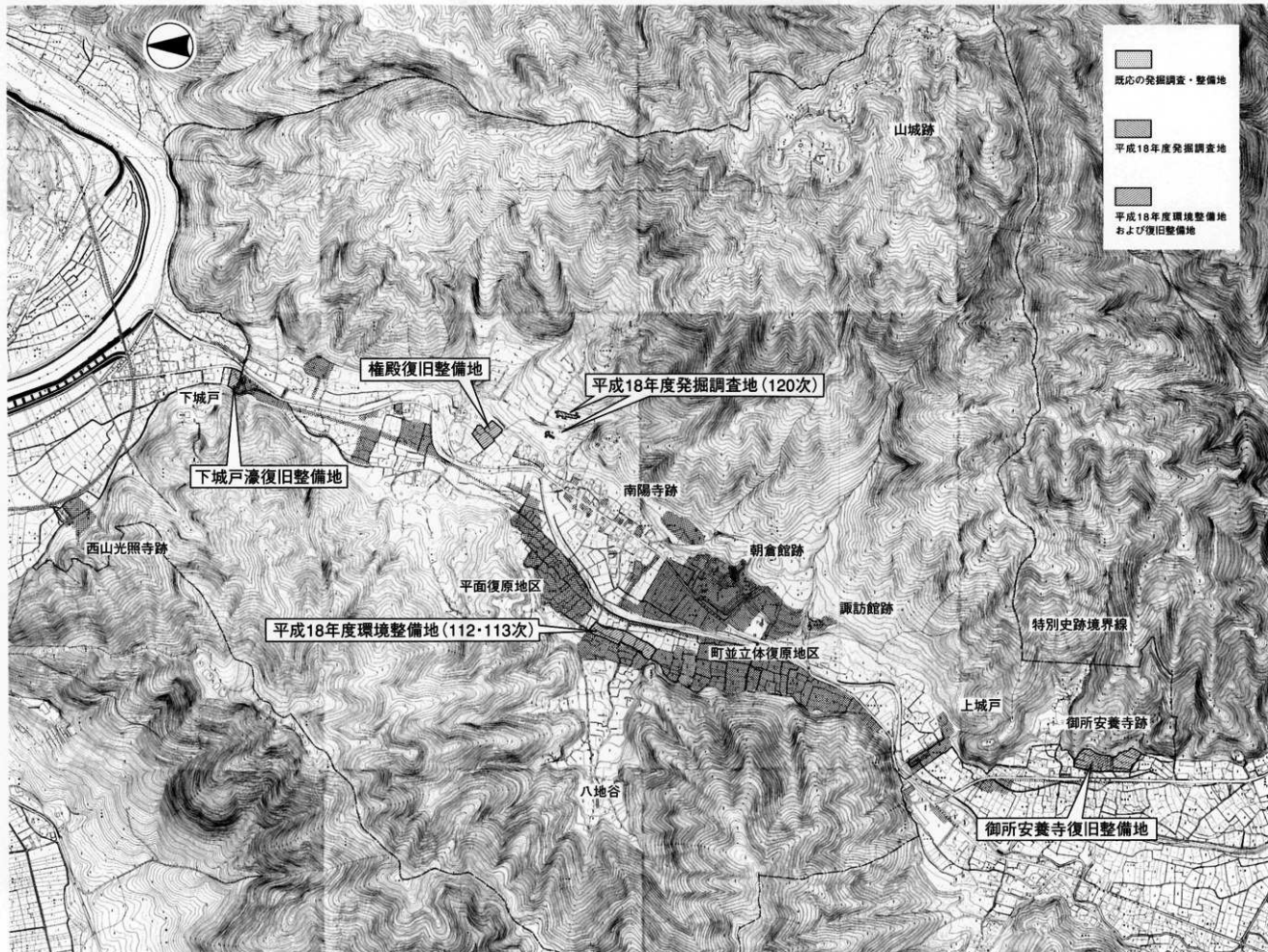
巻首図版

序文

例言

目次

1. 平成18年度の事業概要	3
2. 第120次発掘調査	7
遺構	7
遺物	10
3. 環境整備	19
第1図 平成18年度発掘調査・環境整備位置図	第13図 第113次調査区(雲正寺)整備全体図
第2図 第120次発掘調査位置図	第14図 権殿地区復旧整備全体図
第3図 第120次発掘調査(1区)遺構平面図	第15図 御所安養寺地区復旧整備全体図
第4図 第120次発掘調査(2区)遺構平面図	表1 平成18年度事業概要一覧
第5～11図 第120次調査出土遺物(1)～(7)	表2 第120次発掘調査出土遺物一覧
第12図 第112次調査区(雲正寺)整備全体図	
図版 第120次調査遺構	PL. 1～6
第120次調査出土遺物	PL. 7～10
環境整備	PL. 11～13



第1図 平成18年度発掘調査・環境整備位置図

0 500M

1. 平成18年度の事業概要

平成18年度は国庫補助事業により第120次発掘調査を実施した。山城への道は現在3本あるが、当調査区は権殿から上がる道の標高約70m付近に位置し、重要な施設の一つと考えられている。調査面積は、上殿地区(約100㎡)及び馬出地区(400㎡)の計500㎡である。

遺構については、上殿地区においては蔵跡とみられる石敷建物、馬出地区においては石垣等が検出された。

出土遺物については、岡地区から越前焼の壺や壺・播鉢などが出土した。瀬戸美濃焼では花瓶、鉄釉碗や灰釉皿、中国製陶磁器では青磁碗や染付碗・皿などが出土した。また、上殿地区では簪、馬出地区では釘などの金属製品も出土した。

今回、試掘調査を実施したことで、良好に遺構・遺物が残存していることが確認できた。試掘調査のみでは、両地区の性格や区画割などが十分に把握できない。今後調査範囲を広げることによって、遺構の性格等が分かってくるものと思われる。

環境整備事業については、一般の環境整備事業のほかに、平成16年度の福井豪雨で被災した既存整備地の災害復旧整備事業も実施した。一般では、平成13年度に発掘調査をした第112次調査区(雲正寺)、及び平成14年度に調査した第113次調査区(雲正寺)において工事を施工した。災害復旧では、土砂が堆積した権殿地区や御所安養寺地区、また土砂が流入した下城戸濠について土砂除去等の工事を実施した。

(千木良礼子)

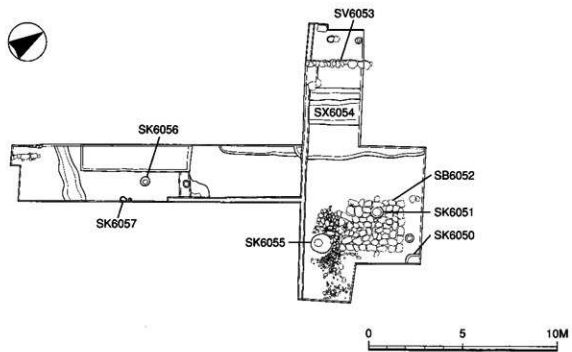
調査回数	調査箇所	調査期間	面積	調査事由
第120次	福井市城戸ノ内町 字上殿及び馬出	平成18年4月1日～ 平成19年3月31日	500㎡	第3次中期10カ年計画に基づく調査

環境整備箇所	整備期間	面積	整備事由
第112次発掘調査区(雲正寺)	平成18年10月10日～	1,600㎡	第3次中期10カ年計画に基づく整備
第113次発掘調査区(雲正寺)	平成19年3月16日	1,900㎡	
権殿地区 御所安養寺地区 下城戸濠	平成18年6月30日～ 平成18年12月1日	4,200㎡ 2,000㎡ 400㎡	平成16年の豪雨被災に対する復旧整備 流入土砂除去、整地、暗渠復旧等

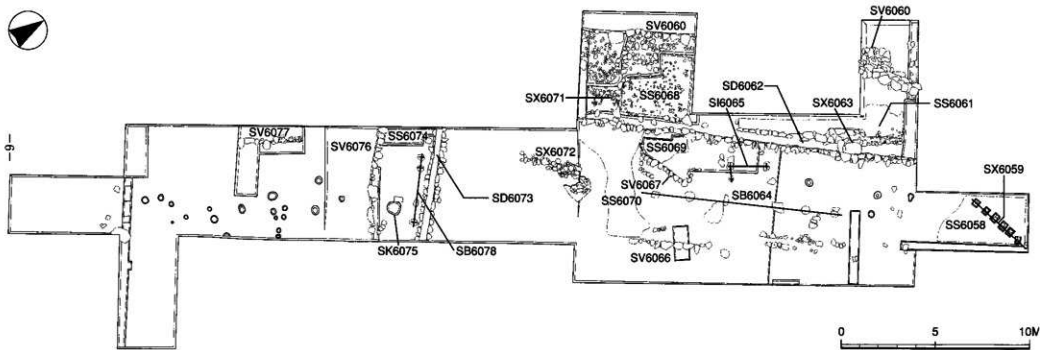
表1 平成18年度事業概要一覧



第2図 第120次発掘調査位置圖(1/2,000)



第3図 第120次発掘調査(1区)遺構平面図(1/200)



第 4 図 第120次発掘調査(2区)遺構平面図 (1/200)

2. 第120次発掘調査

平成18年度は、山城への登山道入口に位置する宇上殿及び馬出地区のうち、計500㎡を試掘調査した。上殿地区と馬出地区は約15mの高低差があることから、ここでは上殿地区を1区、馬出地区を2区とした。

遺構（第3～4図、PL.1～6）

【1区】

上殿地係（約100㎡）の調査区である。0.1～0.2m厚の耕作土を除去すると上層遺構面が検出された。遺構は良好に残存している。

SB6052 川石などを敷き詰めた蔵と考えられる石敷建物が確認された。石の天端には白っぽい帯状の土台の痕跡があった。この痕跡による部材の幅は約115mmあり、外周に数箇所あった。これより建物規模を推測すると、東西方向に真々で約2.6m、東西方向に約2.3m～2.4mであった。また、石敷建物の南北両側に礎石を1石ずつ確認した。棟持柱を支える礎石と考えられる。この礎石の距離は真々で約2.9mであった。また、石敷建物の南側には細長い礎石が2石あり、扉を開いた位置と考えられる。さらに、この石敷建物より南側に隣接して砂利敷を確認した。

SK6050 SB6052の東側において土壌を確認した。ただし、一部、石組と見られる箇所があり、石積施設の可能性もある。また、ここより紅皿が出土した。

SK6051 SB6052内部において、直径約0.4mの土壌を確認した。柱穴と考えられる。

SK6055 SB6052の南側において、直径約0.4mの土壌を確認した。

SV6053 調査区の北側において、南北約3.5m、深さ約0.6mを測る石列を検出した。石列はほぼ2段を確認した。

SX6054 SB6052の北側において、幅約3.0m、深さ約0.4mを測る帯状の遺構を検出した。

SK6056,SK6057 調査区の南側において、下層遺構面から直径約0.2mの柱穴を確認した。建物規模は不明である。

【2区】

馬出地係（400㎡）の調査区である。地表より0.2～1.5m下から1区と同時期と想定される上層遺構面が検出された。確認された遺構には、建物の礎石、砂利敷の道や側溝、屋敷地への出入口などがある。また、下層遺構では砂利敷遺構等が確認された。遺構の埋没後には田畑として利用されていたが、その際に調査区の西側において深さ1.0m以上を埋立て、平地を造成している。

(調査区東側について)

上層遺構面

SX6059 長さ約3.5mの石列を確認した。飛び石のような状態で2石ずつ並ぶ。高さはほぼ同じだが、犬端が水平なものや斜めのものなどばらつきがある。

屋敷割の石垣 SV6060 調査区西側に南北に走る深さ約1.5mの石垣を検出した。連続ではないが、長さは約14.0mを確認した。

SS6061 SD6062に隣接して砂利敷の南北道遺構を確認した。

SS6068 SS6061と接続する道遺構と考えられる。

SD6062 幅約0.3mを測る南北溝である。SS6061に隣接している。

SX6063 SD6062に対する石橋と考えられる。2石のうち、南側の石は天端が傾いた状態で検出された。SS6061から東側の屋敷内へ入るためのものと考えられる。

SB6064 SD6062の東側に南北に走る6石の礎石列を検出した。SD6062とほぼ平行である。長さは約9.5m確認したが、建物規模は不明である。

下層遺構面

SS6058 SX6059より低い位置で、砂利敷を確認した。北隅に向かって下がるスロープ状の砂利面である。

SI6065 SD6062とSB6064の間に位置する礎石建物。間口が約2.0mで、3石がほぼ同じ高さで検出され、このうち2石の上面が平らであった。SB6064の建物へ入るための門跡とも考えられる。但し、SD6062に対して直角ではなく、やや軸がふれている。

SS6070 SD6062に対してほぼ直角にSS6070を検出した。西側(谷側)へ向かってスロープ状に下がる。

SS6069 SS6070より約0.1m低い位置で砂利面を検出した。

SV6067 長さ約3.0mの石列を検出した。但し、天端が水平ではなく、45°程傾いた状態で検出した。用途は不明である。

また、SD6062より下にもぐりこんだ位置に礎石を1石確認した。大きさは240～290mmである。礎石の上面には、ほぼ東西方向に長手の線が刻み込まれ、これに対し南北方向に、約69mm間隔で長さ約90mmの刻線を3本確認した。但し、確認できた礎石は1石のみであるため、建物規模等は不明である。

(調査区西側について)

SV6077 長さ3.4mの南北石列を確認した。石列のうち、北側はやや小さい石のため、表込めの可能性がある。

SD6073 幅約0.3mを測る東西溝で、長さは6.0mを確認した。北側の西半分のみ2段積みまれており、他の箇所は1段であることから、2期に分かれて溝が構築された可能性がある。石列1段目の天端をみると、山側(東側)より谷側(西側)へむかって下がり、これにあわせて溝底も下がっている。これを1期目と考え、2期目で北側石列のみ2段にし

たとえられる。2 段目の石を積んだことにより、天端がほぼ水平になることから、SD6073より北側に建物等を建てるため、造成したのではないかと考えられる。

SS6074 SD6073の南側の西端に砂利敷の道遺構を確認した。SD6073の天端よりやや低い位置で検出したことから、これはSD6073の1 期目の溝に対する道遺構ではないかと考えられる。

SB6078 SD6073に沿って3つの礎石を確認した。高さはほぼ水平である。長さは約3.4mあったが、建物の規模等は不明である。

SK6075 直径約0.5mを測る土壌を確認した。この土壌周辺より、土師質土器が大量に出土した。またこの土壌より西側で、板状で隅に脚のついた笏谷石の加工品が出上した。

SV6076 SD6073と平行に走る石垣SV6076を確認した。深さは最も深いところで約1.2mであった。

(千木良礼子)

遺物 (第5～11図、PL.7～10)

第120次調査で出土した遺物の総数は、25,301点にのぼる。その内訳は第2表に示すように、越前焼628点(2.48%)、鉄軸71点(0.28%)、灰軸72点(0.28%)、土師質23,381点(92.41%)、青磁133点(0.53%)、白磁156点(0.62%)、染付129点(0.51%)、金属製品135点(0.53%)、石製品164点(0.65%)、木製品46点(0.18%)などとなる。調査面積は500m²であり、1m²あたりの遺物密度は50.60点である。

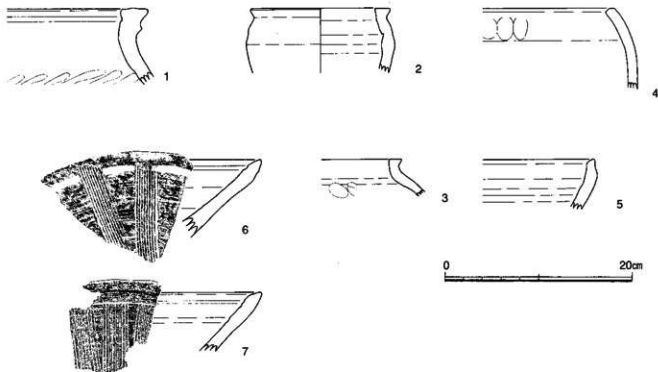
部 種	破片数	%	部 種	破片数	%	部 種	破片数	%			
越前焼	甕	310	青磁	碗	80	金属製品	銅線	32			
	酒	52		皿	31		釘	83			
	鉢	55		鉢	13		小鋸	1			
	漆鉢	209		壺	4		燗釜	1			
	鉢	1		香炉	3		火箸	1			
	その他	1		花裏	1		銅製の金具	1			
	計	628		その他	1		銅製品	1			
	土師質	皿		23,359	計		133	0.53	その他	13	
		土釜		14	白磁		碗	1	石製品	バンドコ	66
		鈴		1			皿	142		口	7
土押		1	坏	12		炉壇	1				
耳皿		3	鉢	1		鉢	5				
香		1	計	156		0.62	壺	6			
その他		2	染付	碗		36	碗	19			
計		23,381		0.92		皿	85	磁石		11	
日本製陶器		銅		58		坏	6	基石		17	
		皿		5		敷	1	計		32	
	壺	5		合子の敷		1	その他	164			
	鉢	1		青山磁	2	0.65	木製品	漆製品	1		
	香炉	1		東南部陶器	1	板材		4			
	その他	1		その他	35	種子		2			
	計	71		0.28	計	38		0.15	ペンガラ	1	
	灰軸	皿		5	朝鮮・その他	35		0.14	炭化物	37	
		碗	50	小計	491	1.94		計	45		
		鉢	8	その他	土	1		合計	25,300	100.00	
壺		2	骨		11						
香炉		1	計		12	0.05					
銅皿		3	小計		356	1.41					
花瓶		1	合計		25,301	100.00					
その他		2	瓦		2						
計		72	0.28		鉢	12					
瓦質		皿	2		香炉	6					
	鉢	12	灰印		44						
	壺	6	瓦管		1						
	香炉	6	その他	6							
	灰印	44	計	71	0.28						
	瓦管	1	国産陶器	瀬戸・美濃	1						
	その他	6		信楽	128						
	計	71		0.28	その他	71					
	国産陶器	瀬戸・美濃		1	五世・その他	30					
		信楽		128	計	230	0.91				
その他		71		小計	24,453	96.65					
五世・その他		30									
計		230									
小計		24,453									

表2 第120次調査出土遺物一覧

【1区】

本調査区における出土遺物の総数は、2,821点にのぼる。調査面積は100㎡である。1㎡あたりの遺物密度は28.22点となる。

越前焼 甕(1)は、口縁部が肥厚し、内面に浅い凹線が巡る。壺(2・3)は、三角形に肥厚した短い口縁をもつ。2は、口径32.6cmを測り、体部内面の調整は粗く、粘土紐の輪積み痕が残る。3は、口縁部の内面に指頭圧痕が残る。鉢(4)は、体部が内湾し立ち上がり、口縁部の内面に指頭圧痕が残る。色調は灰色を呈する。鉢(5)は、体部が直線的に立ち上り、口縁端部はナデ調整により内傾する。搦鉢(6・7)は、体部がほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部はナデ調整により内傾する。9条1組の摺り目を有する。6は、口縁部の内面に浅い凹線が巡る。7は、口縁部の内面に段をもち、体部内面の調整は粗く、粘土紐の輪積み痕が残る。



第5図 第120次調査出土遺物(1)

土師質土器 皿(8・9)は、口縁部に凹線がまわる。9の内面に明瞭な指ぬき痕が残る。皿(10)は、口縁部付近にタール痕が付着する。皿(11)は、胎土は粗く、手づくねにより成形する。皿(12)の口縁端部は、つまみナデにより調整し、破片の断面に煤が付着する。皿(13)は、内面全体と外面の口縁部付近にタール痕が付着する。皿(14~18)は、口縁部に強いナデ調整を施し、底部内面に凹線がまわる。口縁部付近にタール痕が付着する。16の体部内面に指頭圧痕が残る。皿(19)は、口縁部に強い回転ナデ調整を施し、底部内面

に圏線がまわる。皿(20)は、口縁部で大きく外反し立ち上がり、器壁は薄い。皿(21・22)は、口縁部に強いナデ調整を施し、底部内面に圏線がまわる。21は、底部内面に指頭圧痕が残る。22は、底部外面は被熱しており、暗灰色を呈する。灯芯押さえ(23)は、直径2.1cmを測る。

瀬戸・美濃製品 鉄軸碗(24)は、口径11.0cmを測る。鉄軸茶入(25)は、口径2.5cmを測る。灰軸碗(26)は、外面をヘラ掻きで文様を施し、内外面に貫入がはいる。灰軸小皿(27)は、体部に稜をもち、底部外面に輪トチン痕が残る。灰軸小皿(28)は、内外面に貫入がはいり、底部内面に「楽」の印をもつ。高台は、削り出して成形する。

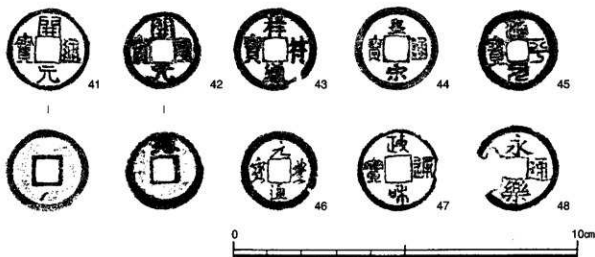
中国製陶磁器 青磁皿(29)は、体部が緩やかに内湾する。青磁碗(30)は、体部外面に線刻蓮弁文様を施す。断面に漆接ぎ痕が残る。青磁鉢(31)は、体部が内湾気味に立ち上がる。青磁碗(32)は、底部のみである。高台がヘラ削り調整され、底部の器壁は厚い。内外面に貫入がはいる。青磁鉢(33)は、体部中ほどで屈曲している。白磁鉢(34)は、体部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は内傾する。内外面に貫入がはいり、色調は灰色を呈する。白磁杯(35)は、体部が直線的に立ち上がる器形で、器壁は薄い。夾付(36)は、体部外面に唐草文様を施し、口縁部の内面に界線が巡る。軸は濁る。

朝鮮製陶磁器 碗(37)は、口縁部に向かってほぼ直線的にひらき、外面にロクロ挽き痕が残る。色調は灰色を呈する。碗(38)は、底径5.0cmを測る。腰部が大きく屈曲し、底部内面と接地面に砂目痕が残る。

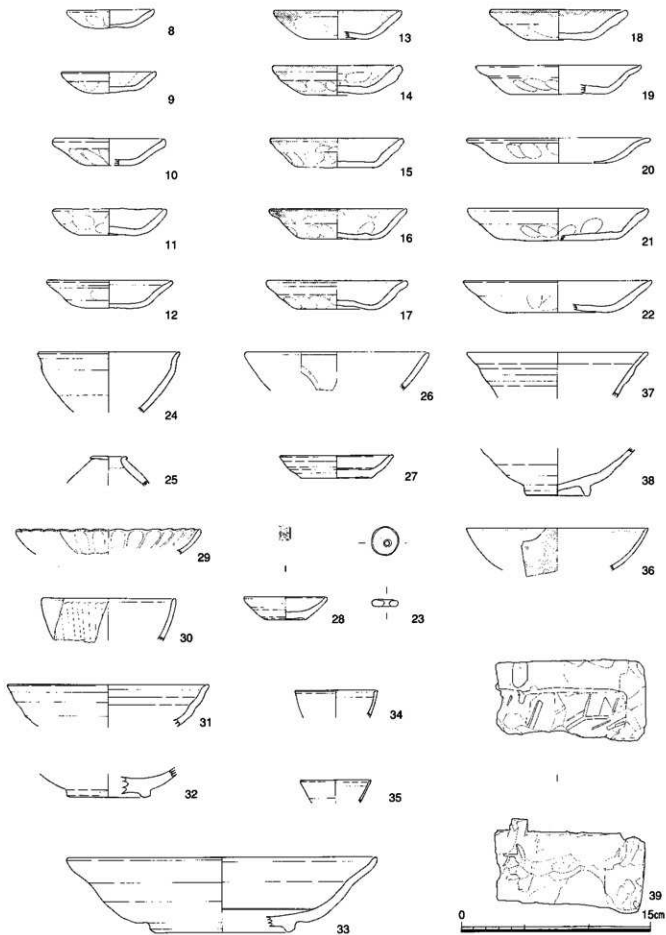
石製品 バンドコ(39)は、平面D字を呈する。底部内面に成形時のノミ痕が残る。

その他 信楽(40)は、壺の破片である。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。

金属製品 銅銭(41～48)は、渡米銭である。銭(41・42)は「開元通寶」である。書体は真書で、対読する。銭(41)は、背面下方に逆「ノ」字形を鑄出す。銭(42)は、背面上方に「洛」字形を鑄出す。銭文部分は摩滅が激しい。銭(43)は「祥符通寶」で、回読する。銭(44)は「皇宋通寶」である。残存状態は良く、対読する。いずれも書体は真書で鑄出す。銭(45)は「治平元寶」である。残存状態は良好で、書体は篆書で、回読する。銭(46)は、「元豊通寶」である。やや剥離があるものの、銭文の状態は良好で、書体は行書で、回読する。銭(47)は「政和通寶」である。剥離部分があるものの銭文の状態は良好で、書体は篆書で、対読する。銭(48)は「永樂通寶」である。剥離があるものの銭文の状態は良好で、書体は真書で、対読する。



第6図 第120次調査出土遺物(2)

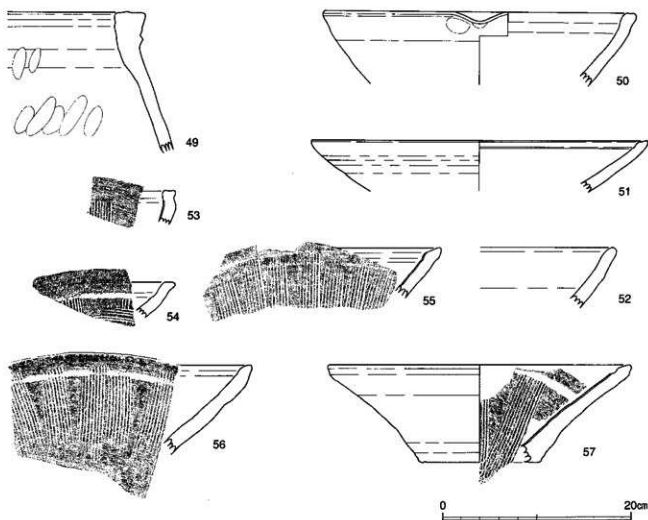


第7図 第120次調査出土遺物(3)

【2区】

本調査区における出土遺物の総数は22,489点にのぼり、調査面積は400㎡である。1㎡あたりの遺物密度は56.22点である。

越前焼 甕 (49) は、口縁部の内面に沈線がはいり、体部外面に格子目押し印がみられる。体部内面に指頭圧痕が残る。片口鉢 (50) は、口径32.6cmを測り、口縁部の内面に沈線がはいり、口縁部分付近に指頭圧痕が残る。鉢 (51) は、口縁部の内面に沈線がはいり、外面全体にロクロ痕が残る。鉢 (52) は、外面に粘土紐による凹凸が残る。摺鉢 (53) は、口縁部の外面に凹線がはいり、口縁部の内面に段がつく。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。摺鉢 (54) は、8条1組の摺り目を有する。口縁部に沈線がはいり、外面全体にナデ調整が残る。摺鉢 (55) は、体部が外方に向かってほぼ直線的に立ち上がり、口縁部の内面に段をもつ。9条1組の摺り目を有する。摺鉢 (56) は、体部が外反気味に立ち上がり、口縁部の内面に沈線を有する。10条1組の摺り目を有する。



第8図 第120次調査出土遺物 (4)

土師質土器 皿(58)は、口縁部が外方に向かってほぼ垂直に立ち上がり、口径6.8cmを測る。皿(59)は、へそ皿である。皿(60)は、口縁部付近にタール痕が付着する。皿(61)は、口径8.2cmを測る。皿(62)は、体部内面の屈曲部分に圈線がはいる。皿(63)は、底部に緩やかに立ち上がる。皿(64)は、口径9.3cmを測る。皿(65)は、底部内面に圈線が返る。皿(66)は、口縁部に強いナデ調整を施し、口径10.6cmを測る。口縁端部にタール痕が付着する。皿(67)は、底部外面に指頭圧痕を残す。この形式の出土は、本遺跡では普通である。皿(68)は、口径11.4cmを測る。皿(69・70)は、体部内面の屈曲部分に圈線がはいる。皿(69)は、口径12.2cmを測り、内面に指頭圧痕を残す。皿(70)は、口縁端部につまみナデ調整を施し、口径13.0cmを測る。皿(71)は、口径15.2cmを測る。皿(72)は、底部内面に丁寧なナデ調整を施し、口径16.6cmを測る。皿(73)は、体部が外反気味に緩やかに立ち上がり、口縁部にタール痕が付着する。皿(74)は、底部より緩やかに立ち上がり、内面に暗文がはいる。58～74の体部外面に指頭圧痕を残す。小壺(75)は、口径6.4cmを測り、器壁が厚い。

瀬戸・美濃製品 灰釉花瓶(76)は、体部内面に回転ナデ調整が残る。底部に糸切り痕が残る。色調は灰白色を呈し、底部内面に自然釉が溜まる。鉄軸碗(77・78)は、体部外面の屈曲部分に段がつく。77は、口径11.7cmを測る。78は、口径12.0cmを測る。灰釉皿(79)は、体部は内湾し立ち上がり、口径5.4cmを測る。底部内面に印花文様を施す。外面全体に釉がかかる。

瓦質土器 風炉(80)は、最大径33.3cmを測る。胎土は粗く、灰色を呈する。

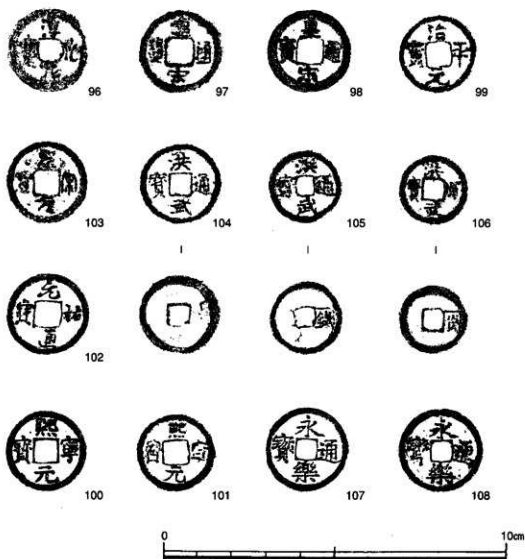
中国製陶磁器 青磁碗(81)は、底部のみである。体部の屈曲部分に稜をもち、高台は削り出しで成形される。底部外面に「三奈」の文字を墨書する。青磁皿(82)は、体部に輪花文様を施す。高台は削り出しで成形され、底部外面は、釉縮み痕が残る。青磁碗(83・84)は、体部が緩やかに内湾し立ち上がる。体部外面にヘラ描きの蓮弁文様を施す。83は、口径13.8cmを測る。84は、口径11.6cmを測る。青磁香炉(85)は、口縁端部が内傾し、体部は直線的に立ち上がり、口径9.2cmを測る。青磁皿(86)は、体部内面の屈曲部分に稜を持つ。体部内面にヘラ描き文様を施す。口径10.6cmを測る。白磁皿(87)は、体部が緩やかに内湾して立ち上がり、口径7.7cmを測る。白磁皿(88・89)は、口縁端部が外反し立ち上がる。89は、軸に若干青みを帯びる。白磁皿(90)は、口径11.4cmを測り、軸は濁る。染付碗(91)は、口縁端部が外反し立ち上がり、口径12.5cmを測る。体部外面に唐草文様を施し、口縁部・体部の屈曲部に界線がはいる。染付碗(92)は、体部が外方に向かってほぼ直線的に立ち上がり、口径12.6cmを測る。体部外面に唐草文様を施し、口縁部の内面に二重の界線がはいる。

石製品 バンドコ(93)は、平面が「D」字形になる。砥石(94・95)のうち94は、4面に使用痕が残る。95は、向かい合う2面に使用痕が残る。

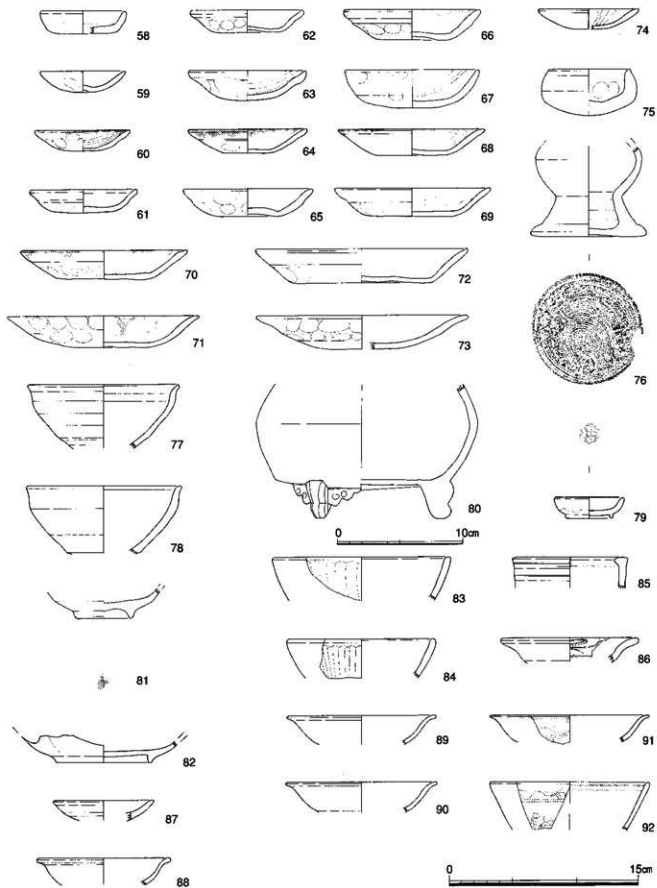
金属製品 銅銭(96～108)は、渡來銭である。銭(96)は、「淳化元寶」である。銭文部分は、腐食による劣化が激しい。銭(97・98)は、「皇宋通寶」である。書体は真書で、対読する。98は、若干反っているものの、状態は良好である。銭(99)は、「治平元寶」である。銭文の状態は良好で、対読する。銭(100・101)は、「熙寧元寶」である。書体は真書で、回読する。101は、腐食による劣化が激しいものの、銭文の状態は良好である。銭(102)

は、「元祐通寶」である。銭文の状態は良好で、書体は行書で、回読する。銭(103)は、「聖宋元寶」である。銭文部分は劣化が激しい。書体は篆書で、回読する。銭(104・105・106)は、「洪武通寶」である。書体は真書で、対読する。105の銭文部分は、劣化が激しい。背面右方に「一銭」を鑄出す。106は、背面右方に、「一銭」を鑄出す。銭(107・108)は、「永樂通寶」である。銭文状態は極めて良好で、書体は真書で、対読する。107は、劣化が激しいものの、銭文状態は良好である。108は、劣化して表面が剥離している。

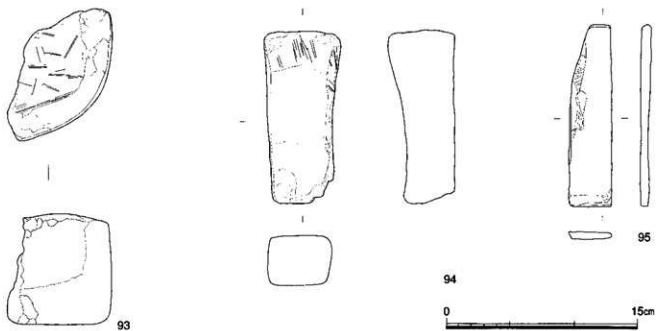
(北野 薫)



第9図 第120次調査出土遺物(5)



第10図 第120次調査出土遺物 (6)



第11図 第120次調査出土遺物 (7)

3. 環境整備 (第12～15図、PL.11～13)

環境整備(一般)

今年度より八地谷川の現状地である雲正寺地区の整備工事を開始した。雲正寺地区の発掘調査は平成13年度より4年計画で始めたが、平成16年には福井豪雨のため一時中断して被災箇所への復旧を行い、翌平成17年度に調査を完了している。整備地区は4地区に分けられる。それぞれ、平成13年度に第112次調査区、平成14年度に第113次調査区、平成15年度に第114次調査区、平成17年度に第118次調査区を発掘している。このうち、今年度は第112次調査区及び第113次調査区の計3,500㎡を整備した。いずれも町並立体復原地区へ続く園路沿いに位置している。

(1) 第112次調査区(雲正寺)整備工事

平成13年度の第112次発掘調査区(雲正寺地係)1,600㎡について整備工事を実施した。敷地は県道脇の園路に隣接し、北に八地谷川、南に斉藤地区が広がっている。

発掘調査では、平坦面に礎石建物、掘立柱建物、付属施設として門、井戸、石積施設が検出されている。また、当地区よりさらに山側(西側)は地盤が高くなり、第114次調査区へ続く。整備地区中央には112次調査区から第114次調査区へ向かって東西に走る砂利敷の道遺構と溝遺構が検出されている。

工事は、まず始めに山側から県道側へ水勾配をつけ、第114次調査区とのほぼ境界部分に排水溝を設け、八地谷川へ排水できるようにした。復原表示について、南端地域は礎石が検出されているが、建物規模が不明であったため、屋敷区画を表示する砂利敷とした。近年整備後の除草範囲が広大な面積となっていることから、砂利下に防草シートを敷いた。砂利敷と東西道遺構の間は、行列溝と礎石建物2棟が検出されている。西側の礎石建物は、建物を砕石基礎にレミファルト舗装で施工し、境界は越前瓦(銀鼠色)を用いた。建物内にカメラ跡が見つかっていることから、これを透水性舗装とした。

砂利敷

礎石建物

カメラ跡

東側の礎石建物は規模が不明であったため、明確な建物境界は表示せず、自然土舗装で仕上げた。整備地中央を走る東西道遺構は砂利混ソイルセメントとした。道遺構より北側は礎石建物が検出されているが、規模が不明である。さらに北側に日隠し堀とも考えられる石列が検出されていることから、ここで空間を分けることができると考えた。石列より南側については確認された礎石建物をレミファルト舗装で表示し、建物周辺を自然土舗装とした。北側については掘立柱建物が1棟検出されており、砕石基礎に自然土舗装で表示し、境界は越前瓦(赤色)を用いた。また柱位置と考えられる場所に150mm角、高さ400mmの栗材を用い、十分の一面取を施して柱を復元し、周辺に砂利を敷いて屋敷地を表現した。また入口階段の踏面を砂利混ソイルセメントとした。

東西道遺構

礎石建物

掘立柱建物

入口階段

遺構表示石

各建物跡、石積施設、カメラ跡、門などの計8箇所遺構表示石を設置した。表示石は花

崗岩を幅350mm×奥行200mm×高さ300mmで加工したものをを用い、前面及び側面はこぶ出し仕上げ、上面を木磨きにして文字を除刻した。また、県道と平行に並ぶ園路脇の溝のうち、北側の門の入口に笏谷石による石橋が2石あった。2つのうち1石が欠けていたことから、これの復原を行った。

(2) 第113次調査区(雲正寺)整備工事

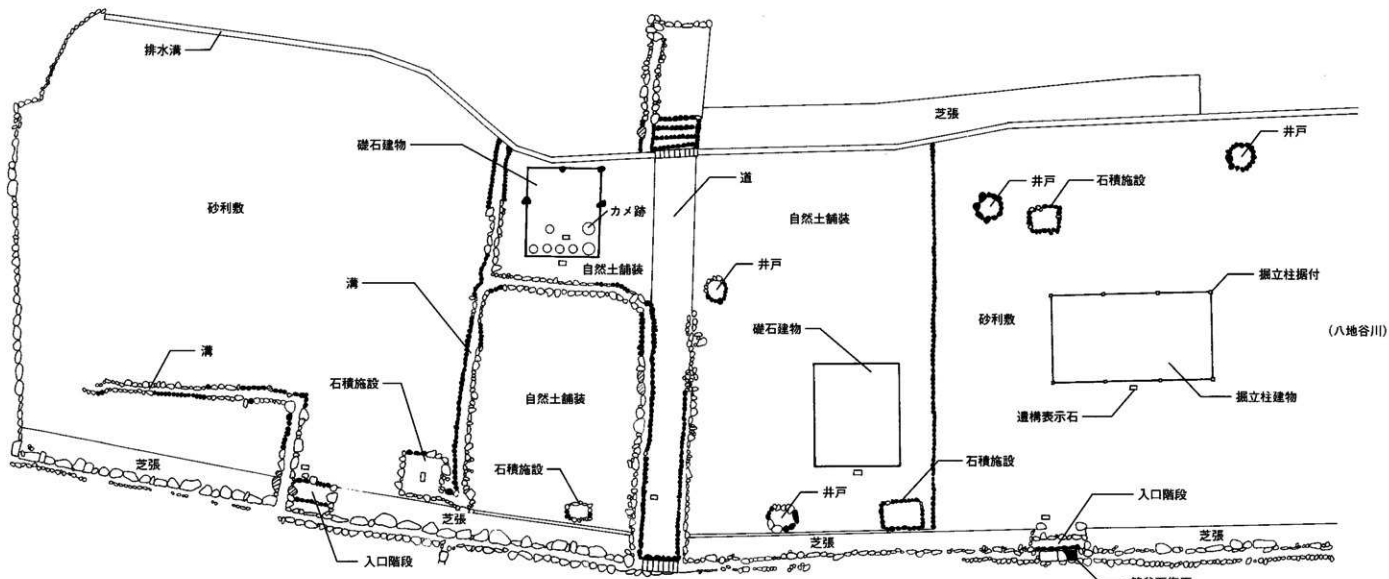
平成14年度の第113次発掘調査区(雲正寺地係)1,900㎡について整備工事を実施した。整備地区は県道より西側、八地谷川北側に位置する。

発掘調査では井戸、石積施設、カメ跡、礎石、土塁、土塁入口、さらに西側に南北へ延びる道遺構が検出された。当調査区は、町並立体復原へ向かう途中の園路脇に位置し、この間、植栽を中心とした場所はほとんどなく、さらに発掘調査において建物の明確な配置や規模等は判明しなかったことから、園路を歩く来訪者に対して憩いの場を提供するため、緑化を中心とした整備を実施した。復原は調査で判明した土塁や道遺構のみにとどめ、井戸や石積施設等は埋め戻し、全面を芝張とした。

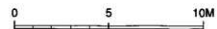
倒石起こし 土塁や道脇に続く石垣は倒石を起こした。大きいもので長辺1.7mほどの石がいくつか倒れていたが、これらを起こし石垣を復原した。また、南北に走る道遺構部分を砂利混ソイルセメントとした。北端はそのまま農道に繋がるようにスロープ状にした。これにより、当地区から隣接する赤湖地区への道が一直線に繋がるのが容易に想像できるようになった。スロープ周辺は水が集まりやすい場所であることから、スロープの下に暗渠を設置し、排水できるようにした。

東西道遺構 また、北端の東西方向へ延びる土塁脇には、平行して道や溝が一部検出されていたが、遺構規模を解明するには至らなかった。しかし、この部分は山からの流水が集まりやすく、現状のままでは遺構が破壊されることが想定されたため、暗渠に砕石を敷き、上面に砂利混モルタルを施して強度を高めた。また、農道との境界は間知石を入れることで法面の崩壊を防いだ。

入口階段 北側中央部分には、屋敷地への入口と考えられる階段が検出されたことから、この階段を復原した。



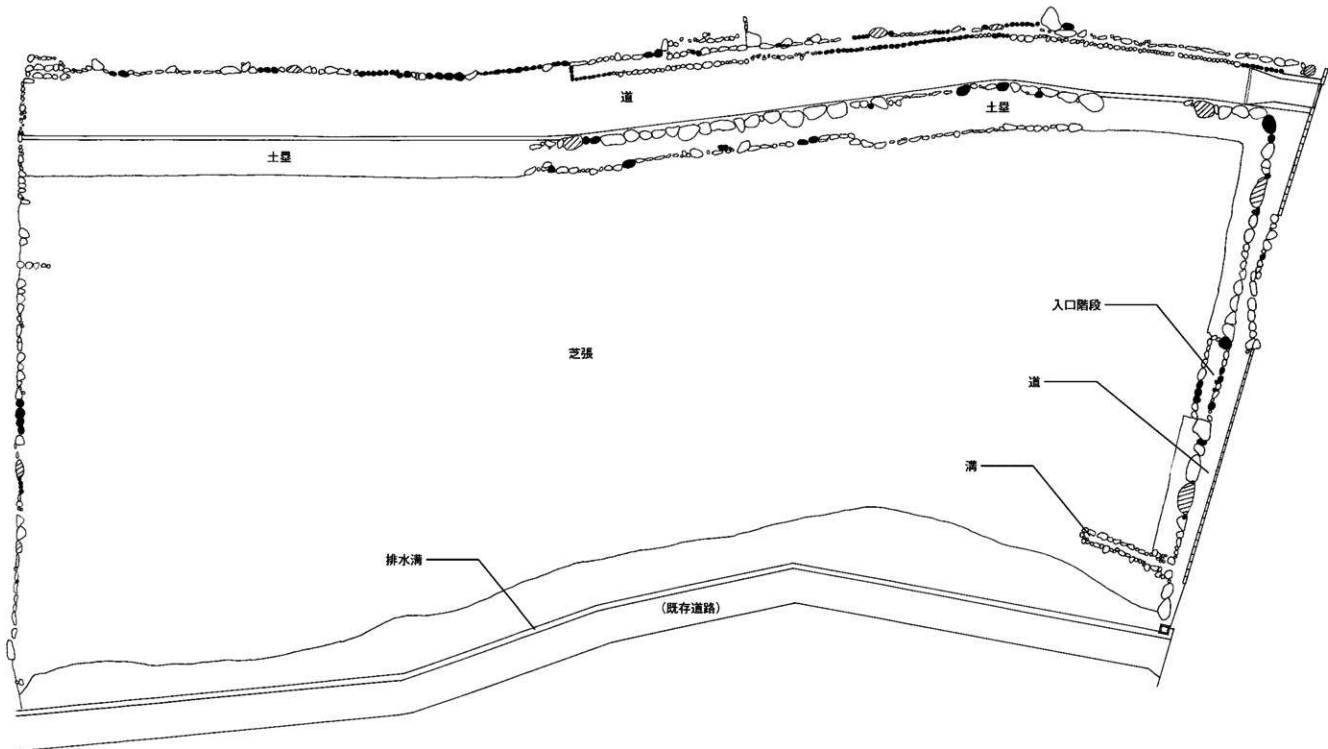
- 既存石
- 倒石起こし
- 補充石



第12図 第112次調査区(雲正寺)整備全体図(1/200)



(八地谷川)



- 既存石
- 倒石起こし
- 補充石

0 5 10M

第13図 第113次調査区(雲正寺)整備全体図 (1/200)

環境整備（災害復旧）

平成16年7月18日の福井豪雨により、中心部を含む遺跡が被災した。被災直後より今年度までの3年間にわたって、災害復旧整備工事を実施し、平成18年度事業において完了した。

(1) 権殿地区復旧整備工事

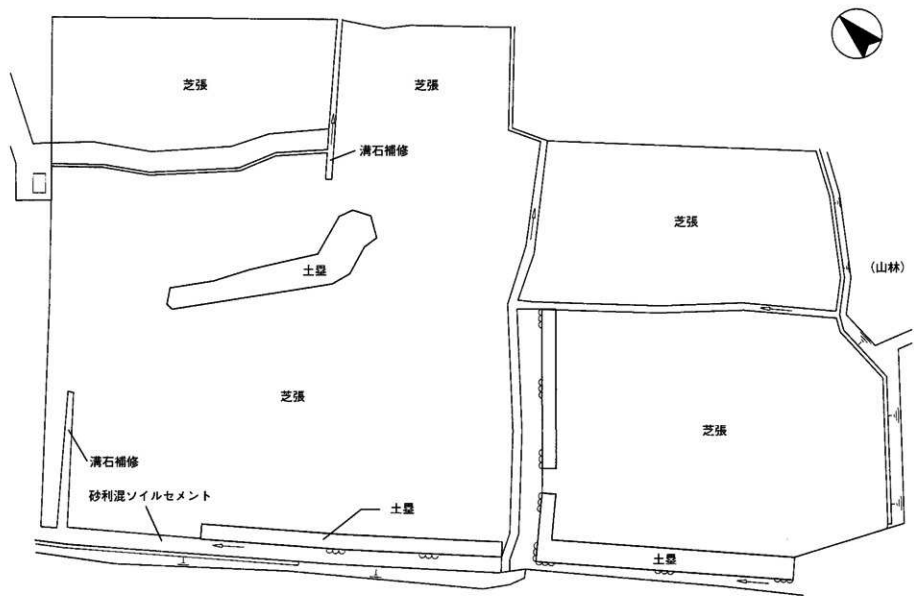
当地区は豪雨の際に一乗谷川から氾濫した水が整備面を走ったため、土砂やゴミ等が蓄積した。被災直後の仮復旧において、一部の土砂は取除いたが、不陸が激しいうえに山水流入が多く、常に湿地帯の状態であった。工事では、整地して水勾配をとり、溝や暗渠を復旧して、雨水等を速やかに排水できるようにし、上面に芝を張りなおした。

(2) 御所安養寺地区復旧整備工事

安養寺地区において山から土砂が流入し、既存暗渠が詰まり、また整備面にあった溝石等も一部埋まった。工事では既存暗渠や既存溝を整備しなおした。また、溝が上下にずれた部分が何箇所もあったため、これを据え直しモルタルで固定した。既存池から既存暗渠への暗渠管を据え直し、池にたまる水が速やかに暗渠へ流れるようにした。

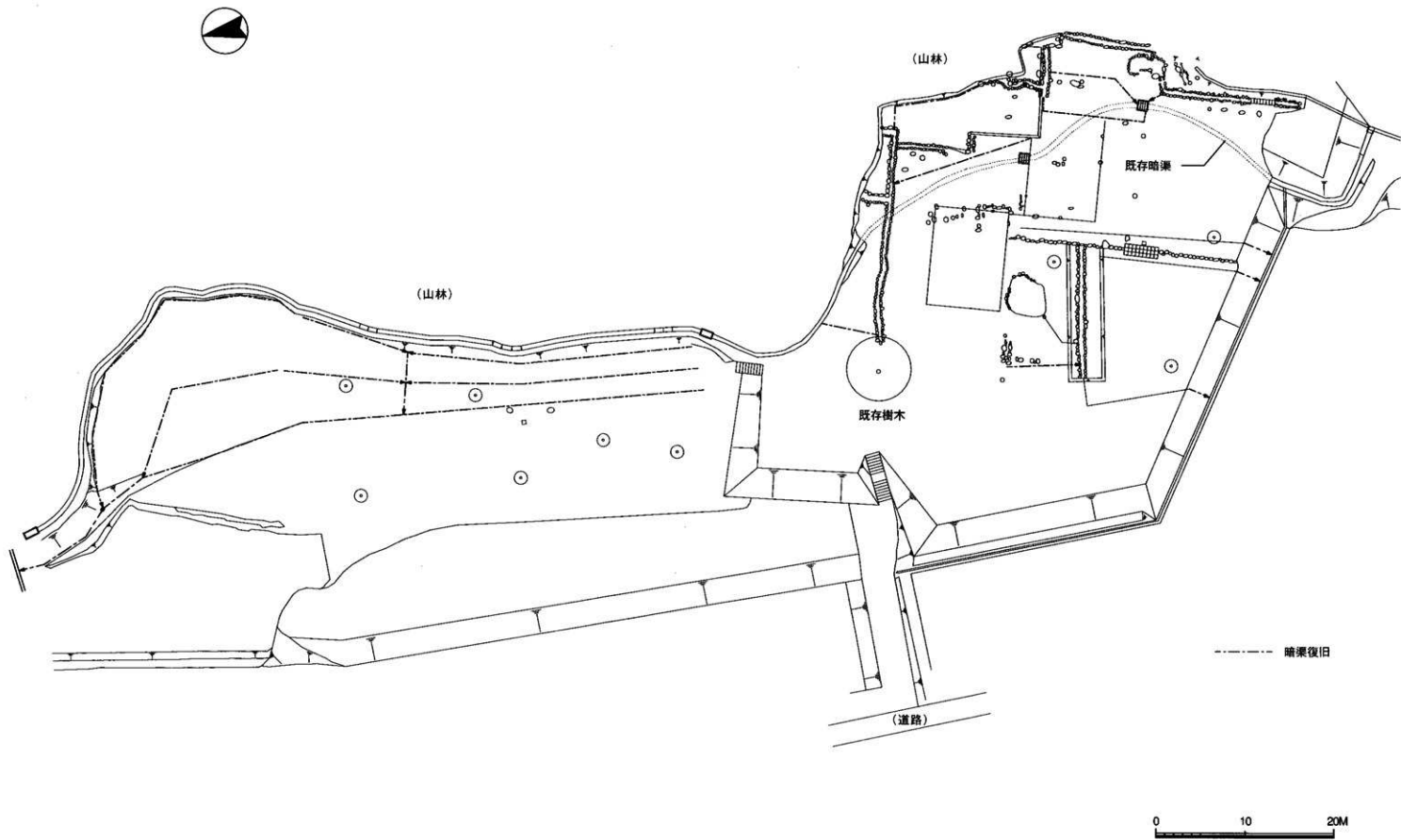
(3) 下城戸濠復旧整備工事

今回の豪雨で土砂が流入し、下城戸北部にある濠を埋めた。工事はこの土砂を取除き、一部被災した濠周辺の植栽整備と整地を行った。



第14図 権殿地区復旧整備全体図 (1/300)

0 5 10M



第15図 御所安養寺地区復旧整備全体図 (1/400)



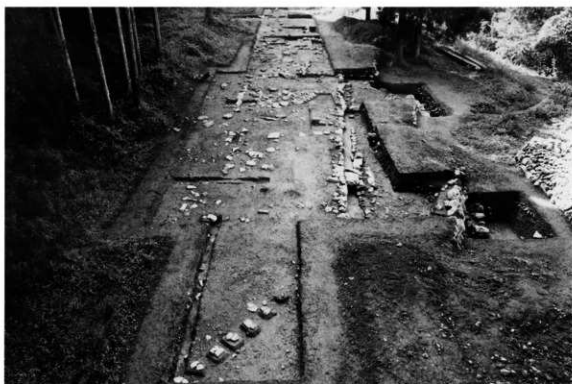
1区 全景 (北から)



SV6053、SB6052 近景 (西から)



SB6052 近景 (南から)



2区 全景 (北から)



SD6062、SX6063 近景 (北から)



SX6063 近景 (西から)



SV6077 近景 (北から)



SV6060 近景 (西から)



SS6070 近景 (西から)



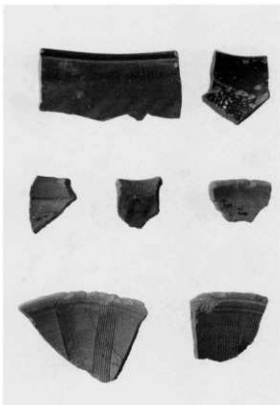
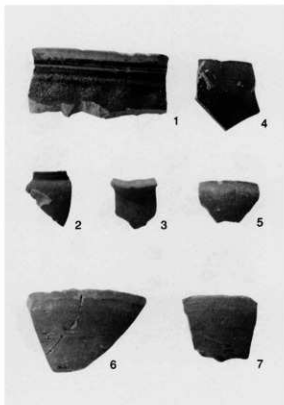
SV6076 近景 (西から)



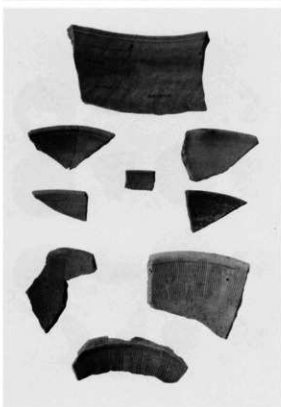
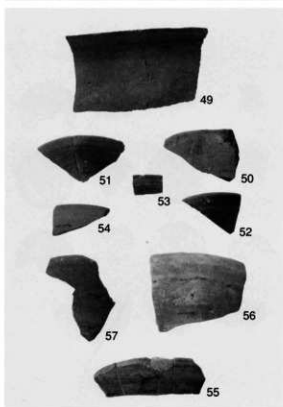
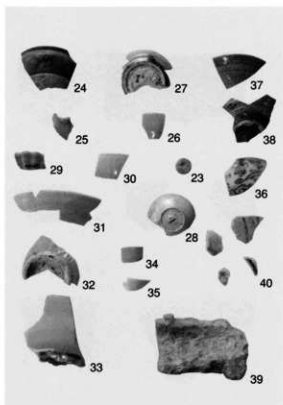
SD6073 近景 (西から)



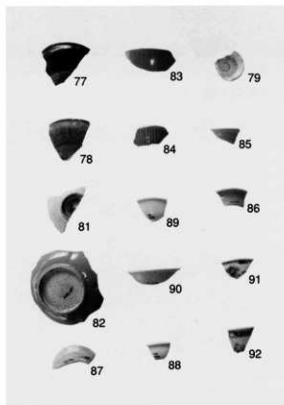
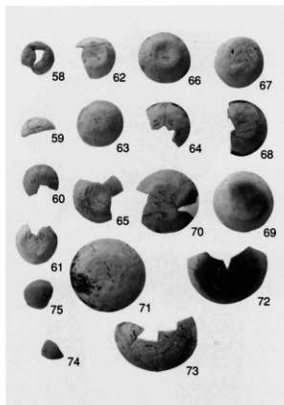
SV6060 近景 (西から)



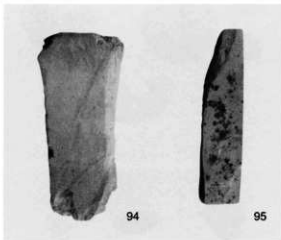
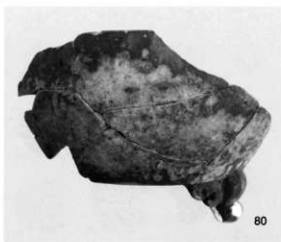
越前焼 甕 1 壺 2・3 鉢 4・5 搦鉢 6・7
土師質 皿 8~22



土師質 灯芯押さえ 23 鉄釉 碗 24 茶入 25 灰釉 碗 26 皿 27・28
 青磁 皿 29 碗 30-32 鉢 33 白磁 坏 34・35 染付 碗 36
 朝鮮 碗 37・38 石製品 バンドコ 39 信楽焼 壺 40
 越前焼 甕 49 片口鉢 50 鉢 51・52 播鉢 53-57



土師質 皿 58~74 小壺 75 鉄釉 碗 77・78 灰釉 皿 79
 青磁 碗 81・83・84 皿 82・86 香炉 85 白磁 皿 87~90 染付 皿 91 碗 92



灰釉花瓶 76 瓦質風炉 80 石製品バンドコ 93 砥石 94・95



第112次調査区(雲正寺)整備工 全景(北から)



第112次調査区(雲正寺)整備工 笄谷石復原



第112次調査区(雲正寺)整備工 全景(北から)



権殿地区復旧整備工 全景(西から)



御所安養寺地区復旧整備工（北から）



下城戸瀬復旧整備工 全景（北東から）

報告書抄録

ふりがな	とくべつしせきいちじょうだにあさくらしせき
書名	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡37
副書名	平成18年度発掘調査・環境整備事業概報
シリーズ番	37
編集者名	千木良 礼子
編集機関	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL.0776-41-2301
発行年月日	平成19年3月30日

調査地区	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
第120次調査	福井市城戸ノ内町字上殿および馬出	18210	史-31	36° 00' 09"	136° 19' 16"	060401 ～ 070331	500㎡	試掘調査

調査地区	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
第120次調査	武家屋敷	室町戦国時代(15-16世紀)	道路5、石敷建物1 礎石建物4	越前焼、土師質土器、瀬戸・美濃焼、中国製陶磁器(白磁、青磁、染付)、朝鮮製陶磁器、石製品、金属製品	標高約70mにおいて、屋敷の区画を確認した。

特別史跡

一乘谷朝倉氏遺跡37

平成18年度発掘調査・環境整備事業概報

発行年月日 平成19年3月30日

編集・発行 福井県立一乘谷朝倉氏遺跡資料館©

印刷 白崎印刷株式会社